

京都く敗者に寛容 である土壌く

「勝者が歴史を作り、敗者は文学を作る」。勝ったものが新しい歴史を作り、敗れたものは文学や芸術を残すとは名言だなと思いましたが。私が敗者の救いとして思い浮かぶのは世阿弥です。世阿弥のメインテーマは敗者の復活、成仏できない人々の救いです。現世で報われない敗者を能の中で復活させ、極楽往生させたのです。ここ京都は、敗者の復活、敗者の救いに出会いやすい土地ではないでしょうか？

現在の世界状況は敗者に容赦しません。とことん叩かれます。どちらが本物か、どちらが正義か、私たちはいつも選択を迫られ、好むと好まざるとにかかわらず敗者を作り続けています。

敗者は抹殺されます。でも敗者にも寛大でいてほしい。逃げ道をつくっておいてあげる。この世で救えないならあの世で救われる、そんな希望を持たせてほしい。京都には敗者に意地悪はするけれど抹殺はしない寛容さがあるように思います。



ほんまもん、にせもん両方に花を持たせる心意気が京都には感じられます。私が一番京都に敬意を表すところはそこにあります。

実は1年前から私は敗者となりました。邦楽箏曲業界トップを走り続け、その弟子であることを誇りに思っていたわが師が昨年6月、突如「退会しないのであれば除名する」と言い渡され、やむなく師は組織を退くこととなりました。一夜にして師と私たち門人の人生は大きく激変し、それまで培ってきた組織の仲間との友好も絶たれ、私たち敗者はこれまでとは異なる演奏環境を求めることとなりました。

京都の風土に助けられ、私の出した結論は家元を非難することでも、戦うことでもない、自分の技量を磨き、一つ一つの舞台に全力を尽くすこと（正極当りの前つもり）でした。

ジャポニズムのこころ く京都から世界へく

「勝者が歴史を作り、敗者は文学を作る」の「文学」は「文化」ともいえます。

私が現在携わるジャポニズム振興会では、日本のこころ、文化を国内外に発信する事業を行います。ご存じのように、幕末から明治にかけて、日本はヨーロッパ近代文明の波に洗われ、国としての存立が問われるような状況にありました。そんな時、浮世絵や琳派など、日本の美術がヨーロッパの美術界を席巻しました。ジャポニズムです。世界の政治経済界の敗者であった日本の美術は、ゴッホなど印象派の画家たち、ガブリエーリ工芸家たちこそ大々影響

を与えたのです。政治、軍事、経済力に対抗できる「文化の力」です。

日本文化には今後世界の規範となるであろう修身の教えが詰まっています。会員の目的は自ら文化を体得し、文化を次世代につなげることです。己を知り、仁義礼智信の心を広げます。

おおたに しょうこ 大谷祥子

箏曲家

東京芸術大学音楽学部邦楽科を卒業、全国賢順記念コンクール優勝、文化庁芸術祭新人賞受賞。「みやこ風韻邦楽アンサンブル」を結成、副団長を務める。「日本の所作・伝統文化を学ぶ」「技術・表現力習得の努力を続ける」「教わる喜びから教える仕合せを学ぶ」の三訓を掲げた指導を行っている。YouTubeチャンネル「大谷祥子」も開設中。